

# この人に 会いたい!

取材・文/杉野佐恵子 撮影/肥野稔朗



かねこ・さちよ ●東京生まれ。7歳で書道を始め、中国古典の臨書に熱中。津田塾大学文学部国際関係学科卒。96年、夫の転勤で神戸へ。自宅近くの香雪美術館や京都などで古典のかな作品の実物に多く接し、書道家として新境地を開く。芦屋書道くらぶを主宰し、子どもから大人まで広い世代に書の楽しさを伝える一方、2000年から各地で個展、二人展、グループ展を開催している。受賞歴多数。

## 上質のアートの香り。墨の魅力あふれる大人の絵本。

書道家 金子祥代さん

物語4編と書作品からなる大人の絵本  
を出版した神戸在住の書道家、金子祥  
代さん。書の知識がなくても書の魅力  
に浸れる、とても美しい1冊だ。そこ  
に込められた作者の思いを聞いた。

7歳のときに自分から進んで書道教  
室に通い始め、以来ずっと墨の魅力に  
とりつかれています。書の稽古はお手  
本にならって字を書くところから始ま

り、古典作品をまねる「古典臨書」へ  
と進みます。そんな練習をひたすら繰  
り返していると、作品を見ただけで、  
書かれたときの筆の動き、その緩急の  
リズムから力の込め方まですべて立体  
的に甦ってくるようになる。古今の名  
作は、実はそういう筆の動きで見る人  
の心を捉えています。そこが、絵画な  
どとは大きく異なる書の魅力のひとつ  
だと思います。やがて自分でもごくま



『インクの魔法』  
(幻冬舎ルネッサンス・2940円)

どことも知れない不思議な店で1本の  
万年筆を手にした「私」が、その日を境に  
自らの意志で歩き始める表題作「インク  
の魔法」。ほかにも3作、まるでほとぼし  
る清流のようなドラマが編まれ、その前  
後や間に絶妙の「間」をおいて配された  
書作品が目と心を奪う。7月7日(火)～  
13日(月)に、恵文社一乗寺店/  
GalleryEnfer(京都市左京区一乗寺弘  
殿町10)で開かれる「インクの魔法展」  
では、この本の原画にも出会う。

れに、まるで何か降りてきたように  
まったく雑念なく筆を運べることがあ  
る、その一瞬のために続けていられる  
ような感じでした。

そのように奥深く、なかなか思い通  
りにならない墨は、私にとっていつま  
でもミステリアスな生き物。続けられ  
続けるほど、ますます書がおもしろく  
なってきます。そして、「こんなにおも  
しろいものが一部の人にしか理解され  
ていないなんでもつたいない」、そう思  
わずにいられません。その思いに突き  
動かされて、たとえば、喫茶店に何気  
なく作品を並べてお茶のついでに書に  
触れていただいたり、ガラスを使って  
筆の動きを立体作品として表現したり。  
いろんなことを試みてきました。

今回の絵本も、その一環です。今、  
身の回りには残虐な話、シヨッキンダ  
な話があふれています。そうではなく、  
ほっとできて何回も読み返したくなる  
ようなお話と一緒に書作品を届けたい。  
そうすれば、個展に関心のない方にも広  
く書作品に触れていただける。そんな思  
いつきから出発して、初めての本づくりに  
挑戦しました。物語を紡いだのは初め  
てですが、頭の中で登場人物が自ら語っ  
てくれるので、私はそれを記録するだ  
け。結果的に4編とも、無国籍な空間を  
何かを求めて旅をする人々のドラマに  
なりました。織り交せる書作品は文字で  
はなく墨象。物語とつかず離れず響き  
合う、いわば墨の抽象画です。とはいえ、  
用いた技法は古来の書道の世界にある  
ものばかり。明らかに筆描きではない  
とわかる屏絵も、書作品に押し落款印  
と同じ技法で彫り上げた篆刻作品です。  
一人でも多くの方にこの本を手にと  
っていただきたい。そしてそれが、日  
本人に受け継がれてきた書の文化に関  
心を持つきっかけの一つとなれば、と  
もとても幸せです。